

○管内のブロイラー養鶏場で続発した集団死亡例の飼養環境調査及び対策

京都府中丹家畜保健衛生所

○坂田千鶴子 森 一憲

【はじめに】令和4年11月及び令和5年2月、管内ブロイラー農場の同一鶏舎（8,300羽飼養、開放鶏舎）において出荷直前の42日齢及び44日齢での死亡羽数増加事例が続発。緊急立入によりHPAIを否定。病性鑑定を行うも原因特定には至らなかったことから、飼養環境に着目し調査を実施。【調査内容】出荷前調査；鶏舎内の二酸化炭素（CO₂）濃度及び風速を測定。入雛前調査；鶏舎内の細菌検査を実施。【結果】当該鶏舎は倉庫から鶏舎に転用された建物で、隣接する建物や断熱材が無く保温が困難。同農場の他鶏舎に比べて給餌器の間隔も狭く設置。出荷前調査から鶏舎内の不均一な風速と鶏の活動が低下する夜間に2,500ppm超のCO₂濃度の上昇を確認。対策として送風機の角度調整、換気方法の変更及び温風ヒーターの導入を指導。入雛前調査では敷料から大腸菌と給水器から一般細菌を検出。敷料への消石灰混和及び給水器の分解洗浄・消毒を指導。対策後は鶏舎内の風速が増加し、CO₂濃度も2,500ppm未満で推移。廃棄率は8.96%から6.78%に低下。【まとめ】飼養環境調査から、換気不良に起因するCO₂濃度の上昇を確認。CO₂濃度は2,500ppm以上で腹水症や突然死症候群を引き起こす危険濃度とされており、死亡羽数増加の原因と推察。冬季は保温と換気の両立が課題となるが、出荷直前の活動が低下したブロイラーへの飼養環境の改善は、出荷時の損失低減に寄与すると考えられた。